

ミュージアム 通信

美肌の始まりは 化粧水作りにアリ!?

[企業史コラム7]
もうひとつの化粧史
—伊勢半グループ製品の今昔—

[かわら版]
ワークショップのご案内

三代豊国画「江戸名所百人美女 芝神明前」・国立国会図書館所蔵
鏡台脇に置かれた化粧水「花の露」。
こま絵には「花露屋」として名を馳せた芝神明前の
林喜左衛門の店を描く。



美肌の始まりは化粧水作りにアリ!?

前回に引き続き…今回
も化粧水のお話です

前号特集では、江戸時代後期の戯作者、式亭三馬が手掛けた化粧水「江戸の水」について、その発売経緯や価格、販売方法、宣伝活動などに触れた。今回は前号と少々視点を變えて、江戸の化粧水事情を見ていくとしよう。

一九世紀以降、とくに文化文政期(一八〇四～一八三〇)頃の資料には、「江戸の水」のほか「花の露」「菊の露」といった名称の化粧水が散見する。前号でも述べたように、これらは商品名こそ異なるが、その中身に大差はなく、同製であったという^{※1}。文化一〇年(一八一三)刊行の読本『都風俗化粧伝』では、茨の花を原料に当時の化粧水「花の露」の作り方を絵図とともに紹介している。その手順は次のとおり(※読みやすいように一部表記を整え、句読点を

を付した)。

「茨の花を摘み取り、蘭引に掛くる。かくの如き器(左図参照)なり。中に湯を入れて沸かし、その上へかの花を入れ、その湯気、上の器に溜まり、口より露出するを茶碗に受けて取るなり」



【意訳】

- ①ここへ上段へ水を入れる。水が温まり湯となったら取り替える。
- ②ここへ下段へ水を入れ、湯とする。
- ③ここへ中段へ花を入れ下段の湯で蒸す。上昇した湯気(花の成分を含んだ蒸気)は上段の水によって冷却され露となり、上段内壁をつたって底に溜まる。

『都風俗化粧伝』「花の露とりよう」より蘭引の図抜粋、当館所蔵

要するにこれは、蘭引という蒸留器具を用いた水蒸気蒸留法による植物精油または芳香蒸留水の抽出である。なお、本書よ

り遡ることちよらうど五〇年前、宝暦一三年(一七六三)に刊行された平賀源内著の『博物品彙』において、すでに蘭引を使った同様の方法による芳香蒸留水「薔薇露」(すなわちローズウォーター)の存在を確認できる。

蘭引は南蛮貿易を通じて日本にもたらされた文物のひとつであり、ポルトガル語のalambiqueを語源するとされる。日本における蒸留器使用の緒は明確でないが、江戸時代には蒸留酒(焼酎、医療用の消毒アルコール)や、植物精油・芳香蒸留水といった香油水の製造に利用が認められるようになる。

さて、源内は、「薔薇露」を「ランビキヲ以テ薔薇花ヲ蒸シテ取リタル水」と説明するが、ここで使う薔薇の花は「野薔薇花」、つまり茨の花を原料に作ったものが「最上」である

と言う。野薔薇は落葉性の蔓性低木で、毎年四、五月に白色あるいは淡紅色の花を咲かせる。日本各地の山野に自生し、河川敷や道端でも目にする身近な植物であるが、江戸時代はこれを専ら薬用に供した。野薔薇には吹き出物や腫れ物などの皮膚疾患に対する殺菌・消炎・鎮静作用といった薬効があるため、その成分を抽出して作った薔薇露は肌荒れケアもできる一種の薬用化粧水であった

と言えよう。事実、源内は本書において薔薇露を「外療」に用いると「功効多し」と記す。外療とは外治のことで、薬剤の塗布や貼付、また鍼や灸のよ

うに体の外から治癒を図る医療行為をさす。まさに薔薇露は顔に塗る薬水だったのである。ところで前掲『都風俗化粧伝』では、引用箇所



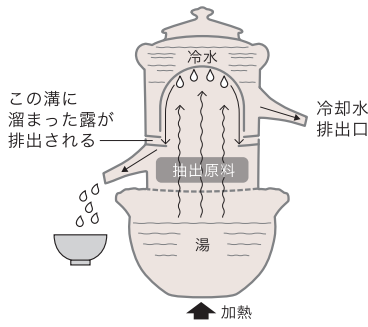
上: 蘭引(全体)
下: 蘭引の中段、回収槽の内部は蒸気を通すように穴が空いている。当館所蔵

して丁子・片脳・白檀を挙げる。これらを茨の花とは別に蘭引に入れて蒸し、抽出した香水を加えた花の露は、さぞ芳しい化粧水であったろう。
蘭引について、もうちょっと語りたい。

西洋の蘭引は銅製や硝子製だが、日本では陶器でこれを作った。上掲図にもあるように、蘭引を熱するための熱源は火鉢や囲炉裏などから得ただろうから、特定の加熱装置を要することは稀であったと思われる。火鉢の灰の中に仕込んだ五徳に掛けられる程度の大きさであることが、自ずと蘭引の典型となっ

ていったのだろう。伝世資料の蘭引の多くは全高四〇〜五〇cm程度、胴径二〇cm程度のもので規模が似通っており、当館が所蔵する蘭引もこれに漏れない。蘭引の構造は、最下段の加熱槽(沸騰槽)、野薔薇などの抽出原料を入れる中段の回収槽(蒸留槽)、冷水を入れる上段の冷却槽から成り、最上部に蓋を乗せる。植物の成分の混ざった水蒸気が上昇し、冷却槽の底にあたって水で冷やされて結露する。この水滴が冷却槽の内壁をつたって回収槽の溝(左画像)部分)に溜まり、横の口から排出される仕組みである。

つまりは水冷式の蒸留器であるから、冷却槽の冷水は温くなる前に都度交換しなければならぬ。



江戸時代、こうした蒸留器具の主な使用者は、医者や蘭学者、薬種業、酒造業などであったようだが、その流通量や生産の実態、また庶民層が所有できる程度に安価な代物であったか否か、判然としない。ただ、前掲『都風俗化粧伝』で蘭引の代わりに薬缶と茶碗を用いた花の露の採り方を紹介していることから察するに(次図参照)、蘭引が一般的器具であったとは考えにくい。



【意訳】
 ①この茶碗に水を入れ、湯となれば取り替える。
 ②薬缶の蓋を逆さまにし、その上に花を乗せ、茶碗で蓋をする。
 ③この茶碗は薬缶の蓋の上に被せるように置く。花の成分を含んだ蒸気が茶碗の内側に溜まり、露となつて落ちる。
 ④薬缶は湯をたぎらせること。
 ⑤薬缶の蓋を逆さまにした図。この蓋の上に別の茶碗を乗せる。ここに花を乗せておけば下の湯が花を蒸し、その水蒸気が③の露が茶碗の底にあり、冷やされて、露が溜まる。
 『都風俗化粧伝』蘭引を用いずして花の露をとるには、より抜料、当館所蔵

もっと手軽で身近な化粧水もありました

「江戸の水」のように市販のブランド化粧水がある一方、蘭引あるいはその代用品による手製化粧水もあつた江戸時代。し

かし、もっと手軽に入手でき、庶民が重宝した天然の化粧水と言え、ヘチマ水である。現在もスキンケアとして製造・販売されているヘチマ水であるが、江戸時代からすでに「美人水」の俗称を持つほど化粧水として定評のあるものだった。ヘチマの蔓を切り、その

切断面から滲み出してくるヘチマ生体内の液体(「ヘチマ水」)には、皮膚細胞を活性化させ、かつ抗炎症作用のあるサポニンや、肌を潤いを与えるペクチンなどの成分が豊富に含まれており、化粧水として申し分のない機能がある。根に繋がっている方の蔓の切り口を徳利や瓶などに差し込んでおけば、一晩で二リットルほどのヘチマ水を採用できる。採取時期として最適なのは旧暦八月十五日、中秋の頃といわれており、「十五夜に女中根っ



ヘチマの蔓を包丁で断とうとする女性。足元にはヘチマ水を溜めるために用意した徳利を置く。
 『神事行燈』第三編(溪斎英泉画・天保元年)より抜粋。立命館大学アート・リサーチセンター提供

切り虫になり「十五夜は女の顔をしこむ晩」などと詠んだ川柳を見出すことができる。その時節になると、ヘチマ水採取に勤しむ女性たちが多かったといふことだろう。入

回にわたって江戸の化粧水を見てきたわけだが、市販品にせよ手製品にせよ、薬用化粧水の流行は白粉による肌荒れに悩む女性が少なくなかったことを暗に物語っている。世の女性が美肌を求めてきた歴史は長い。色の白きは七難隠すと言うが、それも美肌あつてこそ、美肌作りは化粧水作りが始まるのである。

手するため金銭も蒸留の手間も要しない、単に蔓を断つだけで自家採取できるヘチマ水は、庶民層の女性にとつて「コスト最高!」の実利的な化粧水だったのである。
これにてお開き、化粧水断
 資料を手掛りに、二

※1 『守貞漫稿』(天保八年一八三七)参照
 ※2 野薔薇の実や根は昔から下剤や利尿剤、解熱・解毒の薬としても使われてきた。
 ※3 式亭三馬の「江戸の水」の広告では「にきび御顔のでも一切に良く」と本品の機能を謳い、「白粉のよくなる薬との」にも添えている。この点からも、薔薇露(「花の露」)と江戸の水が類似した化粧水であった事実を読み取れる。
 ※4 片脳とは樟脳油から樟脳をつた残りを精製した油。強い香りをもった白色揮発性の液体。
 ※5 例外的に、武雄鍋島家の御焼の窯(三ノ丸窯)で焼かれた磁器製の蘭引が伝わっている。重要文化財。
 ※6 加賀藩前田家上屋敷跡(現在の東京大学本郷キャンパス敷地内)の土抗から一九世紀のものと思われる蘭引(ヘチマ)焼が出土している。大名家などの上流階級による使用実態の一端がうかがえる事例である。
 ※7 『本草綱目啓蒙』(享和三年一八〇三年)刊巻二十四「糸瓜」の項参照

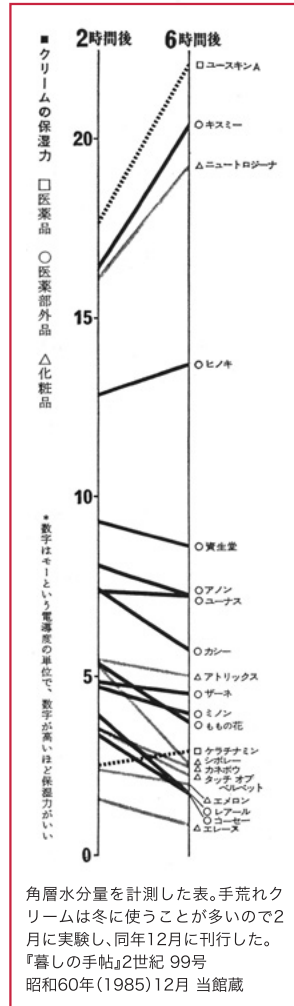
—伊勢半グループ製品の

今昔

—「キスマー薬用ハンドクリーム」

NHK朝の連続テレビ小説「とと姉ちゃん」のモデルとなった大橋鎮子さんが創刊した『暮しの手帖』。一時、さまざまな商品をきびしくテストし、消費者の買物アドバイザーをしていた。そして、とうとう手荒れ用のクリームも、その「商品テスト」の対象になる日がやってきた。

今から五四年前の昭和三七年（一九六二）八月、伊勢半が初めて手がけたハンドクリームとして、「キスマー薬用ハンドクリーム」がある。唇に栄養を与える「のキャッチフレーズで、世の中を席卷した「キスマー特殊口紅」の発売から一五年以上が経ち、日本人の生活が徐々に豊かになってきて、栄養「という言葉の訴求力はまだまだ衰えていない時代だった。そこからさらに一三年



後の昭和五〇年（一九七五）七月、伊勢半は「キスマー薬用ハンドクリーム」を発売する。薬用ハンドクリームは、従来の栄養ハンドクリームの開発技術を踏襲しつつ、より保湿力が高く、べたつかない手荒れ用クリームとして完成し、現在も販売を続ける超ロングセラーヒット商品である。

この薬用ハンドクリームの良さが外部に立証されたある出来事が、昭和六〇年（一九八五）一二月に起きる。『暮しの手帖』の商品テストに「手荒れ用クリーム」が取り上げられたのである。前クールのNHK朝の連続テレビ小説「とと姉ちゃん」でも、商品テストは雑誌の人気連載として話の中核であったので、記憶に新しい人も多いだろうが、『暮しの手帖』は広告を一切掲載しないことから、調査結果には一定の信憑性が得られていた。

右掲、保湿力の比較テストの結果で、ずばぬけて保湿力が高かったとされた三つにキスマーも選ばれている。しかも、これらは塗布後二時間後より六時間後の保湿力が上昇するという驚きの結果である。手荒れでお悩みの方がこの三つを試されて、それでもよくならない場合は、皮膚科へいくことを紙面で勧めるほどである。そこまで最後の砦として評価してくれているが、このテストはあくまで保湿力重視であり、シワ・キメのケアや使い心地といった他の基準でテストした場合、また順位は変わってくるだろう。



発売当初の「キスマー薬用ハンドクリーム」。今日まで容器デザインはほとんど変更していない。

Information かわら版

親子で楽しむ「浮世絵ワークショップ」
 ～摺り実演と細工紅を使った多色摺り体験～
 細工紅とは、紅花から作られた木版画（錦絵）用の赤絵具です。細工紅を使った摺りの実演鑑賞、多色摺り体験をしていただきます。
 2017年2月18日（土）10:30～12:00
 講師：（公財）アタチ伝統木版画技術保存財団
 ■定員：20名（小学生とその保護者10組） ■参加費：500円
 事前予約制（先着順）。お申込みは紅ミュージアム（03-5467-3735）まで。

Since 1825
伊勢半本店 **ミュージアム**
 ●開館時間／10:00～18:00 ●休館日／毎週月曜日
 （月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります）
 東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F
 TEL&FAX: 03-5467-3735
 東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車
 B1出口より徒歩12分
<http://www.isehanhonten.co.jp>